

南アルプス市立小笠原小学校 自己評価書

令和7年1月13日作成

校長： 佐野 紳二	記述者・職名： 深澤 鉄也・教頭
学校教育目標 校 訓「あかるく かしこく たくましく」 教育目標「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成 具体目標 ① 労をいとわず働く子 ② 自分を明るく表現できる子 ③ 進んで学ぼうとする子 ④ 思いやりがあり、礼儀正しい子 ⑤ 健康でたくましい子	
本年度の学校経営方針と理念 「喜んで登校し、満足して下校できる」明日が待たれる学校の創造 (1) 安全・安心な学校づくりの推進 (2) 教育の不易と流行の見定めと率先垂範による教育の推進 (3) 研究研修活動を活性化し、主体的・対話的な授業づくりの推進 (4) 楡形中学校区小中一貫教育に取り組み、地域が一体となった教育の推進 (5) 学校評価システムによる学校経営の推進	
学校経営目標・具体的な取組 「持続可能な社会」の創り手を育成する＝「一人も置き去りにしない教育」の実現 スマイル「笑顔あふれる楽しい学校」の創造 ① 学びをつくる ◇子どもが主体的に参加し、楽しさを感じ、わかったと実感できる授業づくり ② 心をつくる ◇小笠原流礼法の極意である「相手を大切に思う心」を「自然に表現できる」子どもの育成。 ◇学校教育目標「自分を大切にし、他者を大切にする」子どもの育成の意識化、共有化、日常化 ③ よい習慣をつくる ◇基本的な生活習慣の確立、自己管理能力の育成	
I 評価方法	
<p>児童、教職員の2者に対して、アンケート用紙により回答を得た。質問に対しての回答選択肢は基本的に4段階になっている。</p> <p>A：とても・よく～している B：だいたい～している C：あまり～していない D：～していない</p> <p>の4段階で、このうちAとBは肯定的なプラス評価であり、CとDは否定的なマイナス評価である。AとBのどちらを選ぶか、CとDのどちらを選ぶかについては、回答者の判断材料の有無・性格・回答時点の状況等も関係するため、A・B・C・Dを厳密に区別して集計することよりも、A・B合わせてのプラス傾向、C・D合わせてのマイナス傾向として集計する方が、全体的な傾向をつかみやすくなる。</p> <p>そこで、A・B・C・Dの選択肢を点数化し、A=4、B=3、C=2、D=1として集計し、回答者数で割って平均点数をもとめた。平均点数は次のような意味をもつ。</p> <p>○全体にプラス評価（A・B）が多ければ、平均点は2.5点以上になり、4点に近づいていく。 ○全体にマイナス評価（C・D）が多ければ、平均点は2.5未満になり、1点に近づいていく。</p> <p>なお、児童のアンケートには回答の選択肢として E：わからない があるが、これは点数には含めていない。</p>	

Ⅱ 全体評価

○教職員の自己評価、児童アンケート、それぞれの集計結果を見ると、いずれも昨年度と同様で、肯定的な評価の値が高い結果となった。

(令和3年度から学校評価の評価項目を見直し、回答方法も Google form を使って web 上で回答する形式に変更した。評価項目及び回答方法は楡形地区で概ね統一した。)

- ・教職員の自己評価の結果は、22の質問項目に対し、19(20)の項目で評価の平均が3.0を上回る高い評価結果であった。
- ・児童アンケートの結果は、20の質問項目のうち、平均点数化できる16の項目に対し、14の項目で評価の平均が3.0以上のプラス評価だった。
- ・保護者アンケートの結果は、全13の評価項目のうち、平均点数化できる8の項目すべてで評価の平均が3.0以上のプラス評価だった。

以上のことから、小笠原小学校では学校経営方針に基づき、教育目標の実現に向けて、一人一人の教職員それぞれが職務を遂行してきたことにより、教育活動全般にわたって適切な指導が行われ、そのことが児童に肯定的に評価されていると考えられる。従って、本校の学校評価に係る総合的な評価は概ね良好な水準にあると言える。

しかしながら、一つ一つの結果に目を向けてみると、マイナス評価の項目や、プラス評価ではあるがポイントが低い項目が各調査で見られる。また、評価の分散が大きい(C、D評価=マイナス評価が多い)項目についても課題があると考えられる。教職員、児童のそれぞれの調査について、以下の「Ⅲ アンケートごとの評価」で考察し、課題を明らかにしていきたい。

Ⅲ アンケートごとの評価

教職員の自己評価アンケートについて

教職員の回答項目中には、平均ポイントが2.5を下回るマイナス評価の項目が「17」の1つ、プラス評価の中でも評価の比較的低い項目(平均ポイントが3.1未満の項目)は「18」の1つだった。

また、評価の分散が大きい(C、D評価=マイナス評価が多い)項目の「9」「17」「18」については、全てマイナス評価の割合が増加した。

9「あなたは、児童・生徒が積極的に読書活動に取り組むよう指導していますか。」

C評価…4.5%→22.7%(昨年比+18.2)

17「あなたは、学校の教育活動について、おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報していますか。」

2.73→2.35(昨年比-0.38)

C・D評価…31.8%→55.0%(昨年比+23.2)

18「あなたは、教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っていますか。」

3.00→2.58(昨年比-0.42)

C・D評価…18.1%→42.1%(昨年比+24.0)

【考察・改善策】

17「あなたは、学校の教育活動について、おたよりやホームページを通して保護者や地域に広報していますか。」の項目が低い評価になっていることについては、昨年同様に学校全体としてみた場合、決して情報発信ができていないわけではないので、改善策は必要ないとする。また、保護者アンケートの「学校(学年・学級)だよりやホームページから教育活動の様子を知ることができますか。」の項目でも肯定的回答の割合が96.4%と高くなっており、保護者ニーズには応えられていると考えられる。この項目の質問自体を「あなたは」ではなく「あなたの学校は」と考えることとし、アンケートの項目文を変更する。

18「あなたは、教育活動の中に地域の人材や施設を活用し、地域の教育力を生かす指導を行っていますか。」の項目は、C・D評価の割合が24%増加し低評価となっている。各学年の地域の教育力を生かす指導内容が削減されているわけではないことから、原因としては、教育課程上、地域の教育力を生かす指導が位置付けられている学年もあれば、位置づけが無かったり、地域の教育力を生かしにくい内容になって

いたりすることが考えられる。また、「地域の教育力を生かす指導」の捉え方として、「地域の人材」には、学区内に在住の方だけでなく保護者や市役所（教育委員会・子ども家庭相談課等）、社会教育協議会等の組織も含まれること。「地域の施設」には、学区内の店舗や施設だけでなく、消防署・警察署・浄水場・浄化センター・伝承館・文化財等、南アルプス市やその近隣市町の施設や遺跡・文化財・山河等も含まれることを考えると、評価も変わると考えられる。学校・家庭・地域が、よりよい学校教育を通じてよりよい地域を創るという目標を共有し、連携・協働する体制づくりの推進は、今後さらに重要になる。各教科等において体験活動の重要性を認識し、広い視野でとらえた地域の人材や施設を活用した自然体験や社会体験、社会奉仕活動、地域の人々との交流活動等、体験を重視した発達段階に応じた系統的な教育を積極的に推進したい。

9「あなたは、児童・生徒が積極的に読書活動に取り組むよう指導していますか。」の項目では、C評価の割合が増加し、低評価となっている。その原因としては、行事の多さや職員の欠員等による多忙化等から意識的な読書指導が行いづらかったと考えられる。一方、児童アンケートの13「わたしは、本を読んでいる。」の項目は、平均ポイント・否定的回答共に改善がみられた。（※児童アンケート参照）読書については、朝読書の時間の確保だけでなく、授業時間を利用しての図書室の利用等、読書の機会を確保するとともに、図書だよりやおすすめの本の紹介など様々な取組が行われている。また、2学期には、読書週間の取組や、先生方による読み聞かせ、縦割り読書、給食委員会とのコラボ企画等、様々な取組が行われてきた。年間を通しての地道で計画的な取組の効果が数値となって表れたと考えられる。

現代の子どもたちに求められている学力のひとつは「大量な情報の中から自分に必要な情報を読み解き、取捨選択する能力」であると考えられている。読書活動は、その能力を子どもたちに育むための「語彙力を向上」させ、「読解力を高め」、「長文に向き合う力を高める」と言われている。読書活動においては、子どもと本との橋渡しをする教職員の役割が極めて大切であり、教職員の読書指導の質が子どもの読書意欲の高まりを左右する。今後はさらに私たち自身が主体的に読書をし、子どもたちが本好きになるような読書活動を推進していきたい。

児童アンケートについて

児童の回答項目中には、平均ポイントが2.5を下回るマイナス評価の項目はなかったが、プラス評価の中でも評価の比較的低い項目（平均ポイントが3.1未満の項目）は、「8」「11」「13」「15」の4項目だった。

また、評価の分散が大きい（C、D評価＝マイナス評価が多い）項目は、「8」「11」「13」「14」「15」の5項目だった。その中でも「13」については改善傾向が見られたが、「8」「11」「14」「15」については否定的回答の割合の増加が見られた。

8「わたしは、家の人に学校のようすを話している。」（豊かな心）	3.05→3.08（昨年比+0.03）
	C・D評価…24.3% → C・D評価…26.6%（昨年比+2.3）
11「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」（確かな学力）	2.87→2.81（昨年比-0.06）
	C・D評価…34.0%→36.2%（昨年比+2.2）
13「わたしは、本を読んでいる。」（豊かな心）	2.92→3.02（昨年比+0.10）
	C・D評価…32.1%→26.0%（昨年比-6.1）
14「わたしは、自分からあいさつしている。」（豊かな心）	3.30→3.25（昨年比-0.05）
	C・D評価…13.4%→16.7%（昨年比+3.3）
15「わたしは、早寝早起きをしている。」（健やかな体）	3.06→2.93（昨年比-0.16）
	C・D評価…24.1%→28.5%（昨年比+4.4）

【考察・改善策】

8「わたしは、家の人に学校のようすを話している。」の項目については平均ポイントが微増したが、否定的回答の割合は微増しており、学校の様子をホームページやおたよりでお知らせしたり、連絡帳や電話連絡で保護者との連絡を密にしたりする取組を継続することで、家庭での会話のきっかけづくりや学校理解を図っていきたい。

15「わたしは、早寝早起きをしている。」の項目については、平均ポイントが微減した。また、否定的回答の割合が増加した。これまで児童の健康管理についても保健日よりや学年日よりなどを通して、家庭への呼びかけを行ってきたが、目に見える成果としては現れてきていない。今後も引き続き啓発活動に力を入れ、保護者の協力を得る中で、児童の健康管理に取り組むと共に、児童への指導も継続的に行っていきたい。

11「わたしは、授業中に自分の考えを伝えている。」の項目は、昨年同様、全項目中最も評価が低く、今回さらにポイントが減少した。教職員のアンケートを見ると、「「Simple」プログラムの目的意識を理解した指導への取組」の項目では改善傾向が見られるが、「校内研への主体的な関わり」「教材教具の効果的活用」「めあての達成の評価」「学び合いの授業」「深い学びになるよう、課題や発問の工夫」といった項目での平均ポイントが減少している。これは、今年度の行事の多さや職員の欠員等による多忙化と、教職員への課題の周知が徹底できなかったことが原因と考えられる。今後は、教職員の本務の一つである「確かな学力の育成」について一人一人が真摯に取り組み、学校経営目標である『「持続可能な社会」の創り手を育成する＝「一人も置き去りにしない教育」の実現』を念頭に置いて、日々の教育活動に取り組んでいきたい。

14「わたしは、自分からあいさつしている。」の項目については、平均ポイントが微減した。年間を通しての学級指導や児童会等の取組を通して、あいさつの大切さについての意識の高まりは感じられたが、十分ではないので児童の意識を高める上でも、この結果を真摯に捉え、「小笠原スタンダード」を通して具体的に望ましい態度を伝え、指導すると共に、児童会の取組や学級での取組等の充実を図っていきたい。

保護者アンケートについて

保護者のアンケート調査では、昨年度と比較してほとんどの項目で大きな傾向の変化はなかったが、「12」携帯電話・スマホの保留率、「13」携帯電話・スマホの使い方についてのルール作成の2項目は増加傾向が見られた。また、マイナス評価はなかったが、プラス評価の中でも比較的評価ポイントの低い項目に着目してみた。

2「お子さんは、授業の内容が分かっていますか。」 3. 08→3. 06 (昨年比-0.02)

4「お子さんは、家庭学習(宿題や塾・家庭教師との勉強を含む)をしていますか。」
3. 12→3. 06 (昨年比-0.06)

9「学校は、保護者・地域住民からの声に耳を傾けていますか。」 3. 10→3. 07 (昨年比-0.03)

10「学校には教育活動に適した施設・設備が整っていますか。」 3. 15→3. 10 (昨年比-0.05)

【考察・改善策】

この結果から、保護者にとって児童の学習や学習環境に関すること、学校(教職員)とのコミュニケーションについて不安や悩みがあることが分かった。

学校経営目標にもあるように、今後も『「持続可能な社会」の創り手を育成する＝「一人も置き去りにしない教育」の実現』を目指し、一人一人が研修・研究に励み、校内研究を通して教職員も学び合い、『喜んで登校し、満足して下校できる』明日が待たれる学校の創造に向けて、全教職員で取り組んでいきたい。また、「全職員が全校の子どもたちの『担任』をして子どもに対応する」ことを常に念頭に置いて、児童観察と児童との関係づくりを通して児童理解を深め、全職員が連携・協働した学校・学年・学級づくりと学習規律の定着に取り組むことが必要だと感じる。さらに、保護者との情報交換を密にし、児童の様子について相互理解を図ることも大切である。先生方は、日々の授業や各種行事、児童や保護者対応等であわただしい毎日を過ごしているが、常に子供の心情に寄り添い、保護者との電話連絡や連絡帳を使っている情報交換を行ったり、個別懇談等の機会を大切にしたりするなどして、保護者との連携に努めることで担任・学年・学校への信頼関係の構築に努めていきたい。

本校では養護教諭・特別支援コーディネーターを中心にSC(スクールカウンセラー)や市の子ども家庭相談課、さまざまな相談機関や医療機関に繋いだり、連携して支援にあたったりするシステムが整っている。これらを活用し保護者の悩みや不安に素早く対応し、児童の健やかな発達につなげていきたい。

学校の施設・設備については、校舎の老朽化もあり、改善を必要とするものが増えてきている。保護者の自由記述にもあった「和式トイレの洋式化」については、保護者からの要望を市教委に汲んでいただき来年度までに全ての和式トイレの洋式化が実現する。また、黒板についてもすべての教室の張替えが行われる。また来年度は、①勤体倉庫の改修、②プール循環装置修繕、③プールシャワー用ガス温水器の入替等の実施が決まっており、本校の修繕については、市教委も積極的に支援をしてくださっている。今後も教育活動や児童の実態に適した施設・設備を整えるために、保護者・児童・教職員の声を、積極的に・継続的に市教委に届けていく取組を進めていくことが大切だと考える。

Ⅳ ま と め

アンケート調査の結果から、本校の教職員は学校長の示す学校経営理念と方針、学校経営目標を、日常の職務を遂行するための行動指針（具体的な目標）として意識し、日々の業務に使命感と責任を持って取り組もうと努力していると考えられる。また、そうした教職員の意識や姿勢が、児童にとっての『喜んで登校し、満足して下校できる』明日が待たれる学校をつくることに繋がっていくことが伺えた。児童アンケート、保護者アンケートの結果を見ると、本校では、おおむね安定した学校運営がなされており、そのことが児童や保護者にもある程度評価されていると考えられる。

しかしながら、児童アンケート、保護者アンケートの結果において評価の低かった項目は、いずれも、昨年度の調査から引き続き低い傾向が継続している。また、教職員アンケート、児童アンケート、保護者アンケートはいずれも昨年度と同程度の結果となっているが、全体的にマイナス傾向が見られた。これは、個々のアンケートの考察でも触れたが、①複数の欠員等があったことによる人員不足と、特別な行事や研修等による「多忙化」②学校評価の実施回数が、1学期末と2学期末の2回から、2学期末の1回となったことによる「評価項目（内容）と本校の課題の周知不足」が一因だと考えられる。

改善策としては、①欠員の解消を市教委・県教委に要望する。②行事や研修の内容と計画を再考する。③本校の課題と学校評価の項目（内容）を年度当初に全職員に周知し、これを意識して教育活動を実施する。等の取組が考えられる。

学校は児童にとって安全安心で魅力的な場でなければならない。また、児童一人一人の可能性を最大限に伸ばすことを目標に教育活動を行っていくことが、よりよい学校づくりの基盤となっていこう。学校長が本年度のグランドデザインの中で「教育の目指すべきゴール」として示す『持続可能な社会』の創り手を育成する＝『一人も置き去りにしない教育』の実現のためには、我々教職員が学校教育目標や学校経営方針を具現化することを目標に教育活動に当たる必要がある。私たち教職員一人一人が、①学びをつくる「子どもたちが主体的に参加し、楽しさを感じ、わかったと実感できる授業づくり」②心をつくる「小笠原流礼法の極意である『相手を大切に思う心』を『自然に表現できる』子どもの育成」「学校教育目標『自分を大切に、他者を大切に』子どもの育成の意識化、共有化、日常化」③よい習慣をつくる「基本的習慣の確立、自己管理能力の育成」という具体的な取組を念頭に、保護者や地域住民の方々との連携・協働しながら児童の教育を行っていききたい。そのために大切なことは、学校評価の中で明らかになった課題について、教職員が自分事として課題を改善する方法を考え、手立てを講じていくことである。教職員一人一人が自己の課題と向き合い、課題解決の方策を考え取り組む機会を設けることで、よりよい学校づくりを積極的に推進していきたい。